

「統合脳」5領域 第6回総括班会議

日時:平成 17 年 12 月 23 日(金) 16:30~19:00

場所:学術総合センター 2F 貴賓室

出席者: 丹治 順、木村 實、三品昌美、貫名信行、井原康夫、山森哲雄、青木 清、大森治紀、高田昌彦、伊佐 正、泰羅雅登、小松英彦、塚田 稔、榊 正幸、小田洋一

1. 丹治代表から「9月7日中間ヒアリング結果への対応」及び「夏のワークショップのあり方」の2点について(詳細は「第6回総括班会議に際して」を参照)、各領域代表に意見を求めた。

木村第2領域代表:(1)分子、遺伝子、病態領域との連携を重視して領域間の連携を図る、(2)公募研究に対して実施している評価・助言制度を今後も継続する、(3)計画研究については、次回の中間ヒアリングの際の見直しに先行して、18年度から多少の調整を行う可能性もある、(4)研究項目によってレベルに差があるので、その点を是正する、(5)夏の班会議では、特に計画研究を中心にその成果を問う方向で行う。

大森第3領域班員(狩野代表が欠席のため代理発言):(1)関連領域との連携を深めるためには相互に交流することが重要であり、5領域の班会議を合同で行うことが望ましい、(2)支援班による研究支援は、全体のバランスを考慮して、計画班員よりも公募班員からの提案を優先させた方がよい、(3)高い評価の公募研究はより高い充足率で採択すべきである、(4)研究テーマに偏りがある(現状はシナプス形成等が中心)ので、その点を是正する、(5)第3領域が企画する予定である19年度夏のワークショップでは、分子からモデルまでを横断的に扱うようなテーマを5つ程度(例えば、海馬や線条体)選定して、それらに関するワークショップを並行開催したい。

三品第4領域代表:(1)他の領域(特に第3領域)との研究テーマの重複については、分担と連携の両面で対処する。また、研究リソースを活用するとともに、霊長類を用いた研究やウイルスベクターを用いた研究を積極的に推進して高次機能への関与を深める、(2)計画研究と公募研究の較差については、特に中間評価で指摘されなかったため、現時点での対応は考えていない、(3)夏のワークショップについては合同開催が望ましいが、プログラムに余裕を持たせて、交流時間を長めに取るようにすべきである。また、統合的研究の立場からも、第3領域が提案したようなテーマ別のワークショップを開催した方が効果的である。

貫名第5領域代表:(1)第2領域あるいは第1領域等、高次機能領域との連携を重視する、(2)領域内部においては、共同研究等の研究交流の継続と進展をとおして連携を図る、(3)精神疾患に対する多面的な取り組みを推進する。

2. 2月28日の専門委員会に向けての方策について検討した結果、専門委員会を実質的かつ円滑に

進めるため、各領域の考え方を丹治代表が取りまとめた形で、学術調査官をとおして委員会に反映できるように図ることが了承された。具体的には、委員会の冒頭で丹治代表(あるいは各領域代表)から「統合脳」5領域における基本方針を表明し、まず午前中に領域ごとの分科会を開いて十分検討した上で、午後の合同会議で最終的な調整を行う。その際、計画研究については問題点を議論し、抜本的な見直しは行わないこと、公募研究については前年度の内部評価を活用しつつ、各領域の方針を反映した採択が実現できるよう十分な議論を行うことが確認された。

3. 夏・冬行事の今後の運営方針について検討した結果、以下のことが了承された。

(1)夏のワークショップ及び班会議については、19年度以降も18年度と同様、合同開催(ただし、宿泊については原則として各班員が個別に対応)により、領域間の交流と連携を目指すことが確認された。なお、18年度については、8月21日(月)～25日(金)に、札幌市の北海道厚生年金会館及び札幌市教育文化会館(ワークショップのみ)で行う。

第1日午後 第1領域班会議

第2日午前 第1領域班会議、午後 第3,5領域班会議

第3日午前 第3,5領域班会議、午後 ワークショップ、夜 懇親会

第4日午前 第2,4領域班会議、午後 第2,4領域班会議、夜 ポスターセッション

第5日午前 サテライトシンポジウム

(2)冬のシンポジウム及び班会議については、19年度以降も18年度と同様、学術総合センターで合同開催する。なお、18年度については、12月17日(日)～19日(火)を仮予約している。

(3)19年度夏のワークショップの会場を手配する必要があり、企画を担当する第3領域は3月末までに原案を決定し、それに基づいて事務局が最終的な会場予約を行う。

(4)18～19年度は公募研究が継続になるため、それに基づく2年間をとおした年次計画の策定を公募研究が確定する3月末もしくは4月初めに行う(総括班会議を招集)ので、各領域ではそれまでに具体案を検討しておく。年次計画全体の調整と班員へのアナウンスは事務局が担当する。

4. 成果取りまとめについて以下のことが承認された。

(1)各年度における取りまとめ

文部科学省の研究成果報告書に記載する研究成果を、班員全員がホームページにアップロードするとともに、各種委員会の活動成果を取りまとめてホームページ上に公開する。評価委員と文部科学省には、その内容を印刷して送付し、意見を求める。データベース委員会では、研究成果及び活動成果を記載するためのフォーマットを作成し、3月中旬をアップロードの締切とする。その際、論文発表や学会発表の様式を統一した方が望ましいので、データベース委員会及び成果取りまとめ委員会はその方策を検討する。また、特許の取得状況を掲載する際には、取り扱いに注意を要

する場合がありますので、文部科学省に基本的な考え方を問い合わせる。

#### (2) 中間報告書

平成 19 年夏から秋にかけて、「統合脳」5 領域に関する第 2 回ヒアリングが開催されるので、それまでに班員全員が 19 年夏までの研究成果を報告し、成果取りまとめ委員会はそれを取りまとめて冊子体の報告書(領域ごとに計 5 冊)を作成する。19 年夏までに印刷、配布を完了する。

#### (3) 取りまとめ報告書

「統合脳」終了時に、成果取りまとめ委員会は「統合脳」研究期間をとおした研究成果の取りまとめを行い、冊子体の報告書(領域ごとに計 5 冊)を作成する。その内容については別途検討する。

#### (4) 一般向けの出版

研究成果を一般社会に還元するために、各領域の研究成果をわかりやすく一般向けに解説し、公表する目的で、出版を行なう。執筆者・原稿の集め方・出版社等について検討する必要がある。

5. 2009 年 7 月に開催される国際生理学会のプログラム委員会からホールデイシンポジウムの開催要請があり(伊佐班員および大森班員から具体的に説明)、それについて検討した結果、「統合脳」5 領域は共催、自由参加という形で協力し、それに向けて企画委員会を設置することが承認された。

#### 6. その他

(1) 貫名第 5 領域代表から「ゲノム・脳連携ワークショップ」について、今回は 100 人以上の参加者があり盛会のうちに終了したが、次回は脳領域からゲノム領域主催のワークショップに参加してほしいこと、また、互いのホームページにアクセスできるように検討してほしいとの依頼があった。脳とゲノムは多くの研究分野を共有しており、今後も研究テーマや研究リソースに関して密接に連携していく必要があることが確認された。

#### (2) 各種委員会からの活動報告

研究リソース委員会(高田委員長): 中間評価の際に「研究費の再配分にならないように留意すべきである」という指導があり、今後はその点に関して慎重に対応していく。現在リソース開発が進められている 11 課題については、年度末に報告書及び次年度以降の計画書の提出を求めるが、2 年目の 18 年度は基本的に 17 年度と同様の支援を行い、本格的な見直しは 2 年終了時に行う。

データベース委員会(伊佐委員長): 今後の活動内容として、研究者情報データベースの構築、優れた研究成果の掲載、理研 BSI との連携によるニューロインフォマティクスの構築(理研から予算配分; 京大 宮川氏にマウス行動解析におけるテストバッテリーの、理研 藤井氏にニューロンデータのデータベース化を依頼)、リンク先の増加、を検討中である。

研究者育成支援委員会(青木委員長): 若手研究者の交流を目的とした地域別の研究会が順

次開催されている(12月9,10日 九州 西、鍋倉氏が担当;1月9,10日 富山 西条氏が担当)。

対外委員会(泰羅委員長):脳の世界シンポジウムが大阪(9月)、名古屋(10月)、東京(11月)で開催され、いずれも盛況であった。18~19年度は、脳の世界展が東京(3~5月)、長崎(7~9月)、名古屋(10~11月)、大阪(3~5月)で開催される予定である(現在、パンフレットを作成中;シンポジウムも同時開催予定)。

実行委員会(小松委員長):今回の冬行事への一般参加状況(共同研究者を含む)は、公開シンポジウムが約260名で、班会議が約200名であった。今回の開催に当たっては、実質化及び簡素化を図るとともに、実行委員の負担を軽減するため、各領域の計画班員にも協力(会場設営等)を要請した。今後もこのような役割分担制を導入していきたい。

領域内広報委員会(小田委員長):統合脳ニュース第2号の掲載記事として、神経科学学会の印象記、プレス発表された研究成果を掲載する予定である。

(3)夏・冬行事の参加基準について以下のことを確認した。公開シンポジウムを除く夏・冬行事への参加は、最新の研究データの守秘等を考慮し、原則として班員(評価者を含む)及び共同研究者に限る。クバプロ等、一般人がリンクできるホームページには公開シンポジウムの情報のみを掲載する。

(4)丹治代表から、ポスト「統合脳」に向けてそろそろ準備を始める必要があるので、各領域でまず基本的考え方、すなわち今後も連携を基盤とした方向で進むべきかどうか、について十分検討してほしい、という依頼があり、次回の総括班会議(3月末もしくは4月初めに開催)で議論することになった。